コケはなぜに美しい(1)

「※苔の衣」などの言葉を用いなくなった現代の人々にとって、もっともコケを身近に感じるのはいつだろうか。おそらく「日本庭園(＝コケ庭)」を訪れたときではないだろうか。

わび・さびの風情を醸し出す日本庭園においては、いつもはコケにされがちのコケが主役級の存在感をみせる。しかし今でこそ、庭園になくてはならないコケではあるが、日本庭園ではもともとコケは使われていなかったらしい。苔寺として世界的に有名な※西芳寺(京都)でさえ、作庭当初は白砂の広がる庭だったようだ。しかし、室町時代の応仁の乱の後に寺が荒廃し、いつしか庭園が広くコケに覆われるようになったとされる。今では「苔寺」とよばれ、コケが西芳寺の代名詞にもなっている。

①こうした趣向の変化には、日本文化の変遷が深く関わっている。何にでも流行りすたりがあるように、②文化も時代ごとに大きく変化する。この流れを大まかにみると、『源氏物語』の世界でみられるような平安時代の華やかな貴族の文化から、鎌倉時代の素朴で力強い武家の文化。そして室町時代の禅の精神をとりいれた文化へと移り変わっていく。庭園もこうした文化の変化に呼応して豪勢な貴族の庭園から、実用的で質素な武家の庭園、禅のための庭へと流行が変化していった。そして風情を追求した庭園として登場したのが「コケ庭」だったのだ。

庭でコケが大切に扱われているのも、その美しさが③和の文化の美意識、「わび・さび」を見事に体現しているためだ。コケほどわび・さびの風情にぴったりの植物はほかにはない、といってもいい。では④なぜ、コケがわび・さびの風情を醸し出すのだろう?

「わび」「さび」は、本来は別の意味の二つの言葉である。わびは「侘びしさ」からきており、転じて「十分でないもの・不足しているもののなかに見出す美しさ」を表す。その一方、さびは「寂しさ」に由来し、「ひっそりと寂しいもののなかに見出す美しさ」につながっている。この二つが組み合わさった「わび・さび」は、静寂さや質素なもののなかに美しさを見出す美意識、とされる。静かで質素なものがもつ美しさ……これは小さくて花もないために目立たず、しかし透き通るような美しさをもつコケの印象そのものではないだろうか。

さらに、コケは庭園にわび・さびの風情を添えるだけではない。コケのしっとりとした色合いには、間接的に庭園の美しさをひきたてる効果もある。コケの上に、春には桜が、夏には白い沙羅双樹(夏椿)が、秋には深紅の紅葉が舞い落ち、冬には真っ白な雪が覆う。コケの緑が季節の移ろいを鮮やかに引き立て、庭園の四季をより美しくみせてくれる。

(大石善隆『コケはなぜに美しい』NHK出版 による)

※苔の衣…僧侶や隠者などが着る粗末な衣服のこと。
西芳寺…京都市西京区にある寺院。世界遺産に登録されている。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「こうした趣向の変化」とはどのようなことか。適当なものを選びなさい。

ア かつてはコケが含まれる言葉が広く用いられていたが、現在ではコケになじみがなくなってしまったこと。

イ かつては日本庭園にコケは使われていなかったが、今ではコケが庭園になくてはならないものになったこと。

ウ かつては白砂が広がり美しく整えられていた寺が、応仁の乱によって荒廃してしまったこと。

［　　］

(2) ――線②「文化も時代ごとに大きく変化する」とあるが、本文に従って各時代の文化の特色をそれぞれ選びなさい。

A 平安時代［　　］

B 鎌倉時代［　　］

C 室町時代［　　］

ア 禅の精神をとりいれた文化。

イ 素朴で力強い武家の文化。

ウ 華やかな貴族の文化。

(3) ――線③「和の文化の美意識、『わび・さび』」とあるが、「わび・さび」とは何か。本文中から二十字以上二十五字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

□□□～□□□

(4) ――線④「なぜ、コケがわび・さびの風情を醸し出すのだろう」とあるが、この答えを筆者はどのように考えているか。適当なものを選びなさい。

ア わび・さびの風情を醸し出す日本庭園では、コケはあまりなじみのない存在だから。

イ コケに覆われた庭は、風情を追求した結果として登場した華やかな庭園であるから。

ウ 目立たないが透き通るようなコケの美しさは、わび・さびの美意識に合うものだから。

［　　］